

東洋文庫における保存修復作業の紹介

～製本室での作業の記憶を交えて～

水口 友紀・西蘭 一男

はじめに

私たちは2014年4月から図書作業室において保存修復業務に携わっている。東洋文庫の保存修復業務は2009年3月までは製本室があり、そこで資料の製本や保存業務が担われていた。図書作業室で使用している道具や材料など当時からのものも多い。現在（2017年度）非常勤職員3名による作業を各人週2日行っている。そのうち本稿の筆者2名が同日に作業しており、1名が製本室で作業に従事していた者である。図書作業室で行われている作業の概要とその一部であるが代表的な事例を紹介する⁽¹⁾。併せて製本室の当時の様子も記す。

1. 作業の概要

1-1. 保存修復作業の概要

作業内容としては、主に資料の状態調査、保存容器の作成、資料の修復処置がある。

資料が作業室に至る流れとしては、資料劣化調査・対策票⁽²⁾の記載又はミュージアムでの展示予定資料リストに基づいて私たち作業者が書庫から資料を持ってくる場合や担当者から対象資料についての相談又は直接の資料の持込が行われる場合がある。

資料の形態としては、洋装本、和装本、漢籍、卷子、一枚物等がある。保存容器の作成や、修復処置とその記録など状況に応じて似たような作業を要する資料をまとめて行っている。また、展示前の資料状態の調査及びそれに付随する作業や、製本形態ごとに洋装本、和装本・漢籍、そ

の他など、大まかな年間作業計画を立てている。

1-2. 製本室（1960年代後半以降）の様子

旧製本室時代にも資料の状態調査、保存容器の作成、資料の修復処置は行われていた。1960年代後半頃は、前述の他に和洋雑誌・紀要類の合冊製本も多く行われていた。しだいに資料の保存について重要視されるようになり、破損しているものを優先して直していこうという考えのもと、合冊製本は業者に頼むようになった。また作業としては、敦煌文献の写真版の製本の作業が多く行われていた。他に資料の保存とは直接関係ないが、会計書類の製本を行ったりもしていた。

1960年代当初は、製本や帙などの保存容器の破損のひどいものの殆どは新たに作り直していた。現在では、できる限り原装を保持した最小限の処置に留めている。作業の記録は作業日誌という形で行われており、記録用紙はあっても内容は細かくはなかった。

資料は、随時目録担当や閲覧担当の職員から持ち込まれるものや、製本室の作業者が書庫に入って製本室に持ってきていた。資料の状態調査は書庫で行われており、劣化の程度を大・中・小に分けて記録していた。その記録などに基づいて作業が進められていた。

年度末になると翌年度の作業計画をたてるようになり、1年間で洋装本、和装本（帙を含む）、漢籍（帙を含む）、地図類などの1枚ものの作業計画を前年度の作業や状態調査等をもとにして立てていた。年間の作業計画を立てるようになったいきさつは、作業の効率化である。それまで資料を製本室の作業者がその都度書庫で見つけて持ってきたり、目録または閲覧の担当者からの持ち込みに応じて作業していたため、作業内容が異なるものが多く、作業の効率が悪かった。計画をたてるようになってからは、緊急のもの以外は年間計画を事前に周知して類似の作業の時に該当資料を持ち込んでもらうようにしていた。また計画は、材料をまとめて調達するのに利用された。製本室の作業者は常時2人程、保存箱づくり等特定の作業をする作業者が週1、2日程いた。

2. 保存修復作業の事例

以下にこれまでに行った作業の概観を4例紹介する。

2-1. 洋装本の処置

ここでは、モリソン文庫⁽³⁾の資料の処置の例を紹介する。

モリソン文庫は主にミュージアムの一部であるモリソン書庫に配架されており、ミュージアム来館者の目に留まる機会が多い資料群である。なかには本文が背の部分ではっきりと割れていたり、表紙や頁が外れている等の破損した資料がある。破損等で取り扱いに注意を要する資料は応急的に中性紙封筒に入れた状態で保管されている。これらの資料を本の形態が見える形で配架できるように処置を行っている。写真1～4は、

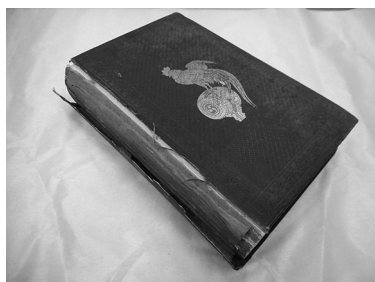


写真1 処置前 背表紙が一部欠損している

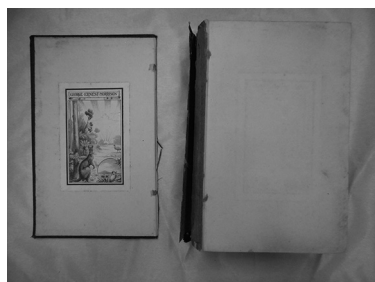


写真2 処置前 表紙がはずれている

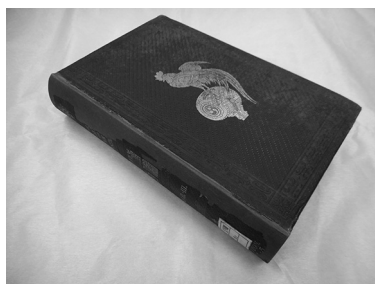


写真3 処置後 背表紙の欠損部分を和紙で補った

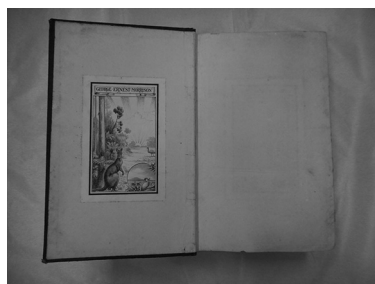


写真4 処置後 表紙の接合を行った

その1例である⁽⁴⁾。背表紙の破損と表紙がはずれている状態のものであったため、背の欠損部分を和紙で補い、表紙の接合を行った。ただし処置に耐え難い非常に劣化した資料については、保存容器を作成することもある。

2-2. 和装本・漢籍の処置

和装本や漢籍の処置の中で多い作業としては、綴じ糸の綴じ直しと帙⁽⁵⁾の直しがある（写真5～10）。

綴じ糸は外側に面しており、下部分の糸が擦り切れていることが多い。そのため、綴じ糸全体を新しい糸で綴じ直す場合と下部の切れた部分に糸を足して綴じる場合などがある（写真5・6）⁽⁶⁾。

帙の破損状態としては、留具であるつめ（こはぜ）の欠損や紐部分の切れ、折目である角の破損による分離や取れかけが多い。紐状のもので



写真5 処置前 綴じ糸の切れと角裂の欠損



写真6 処置後 綴じ直しと角裂の新規貼付



写真7 処置前 紐が切れてつめが残っている



写真8 処置後 新しい紐をつけ、元のつめを使用

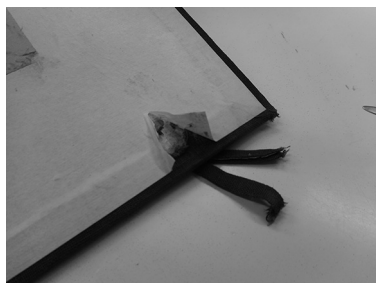


写真9 処置中 内側の紙をはがし、
切れた紐を取り外す

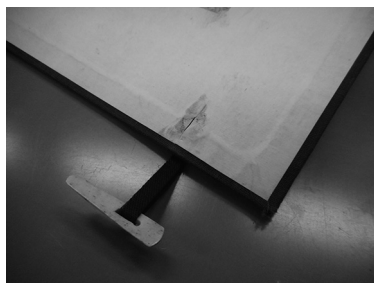


写真10 処置中 新たな紐に元のつめ
を通して取付け

応急的に縛って分離するのを防いでいる状態のものなどが書庫で見られる。留具の破損のみである場合は、その部分だけ新しいものに交換して、帙として機能する状態にしている（写真7～10）⁽⁷⁾。

2-3. 掛軸の処置

資料の取り扱いと展示にあたり、応急処置を行った例をあげる。

大明地理之圖⁽⁸⁾は、4幅で1つの地図を成す掛軸である（写真11）。状態としては、本紙と表具の紙の破れ、浮きや変色が見られ、紙が脆く弱っている部分もある（写真13・15）。また本紙の折れやゆがみも多数見られた。資料の寸法が1幅で横1m×縦3mほどあったため、図書作業室の作業台では広さが足りず、会議室を借りて状態調査を含め修復処置の作業を行った（写真12）。破れについては今後広がりにくいように、



写真11 大明地理之圖 展示風景



写真12 状態調査及び処置風景



写真13 部分 処置前 破れと折れ



写真14 部分 処置後 裏面から和紙で補強



写真15 部分 処置前 本紙の浮き



写真16 部分 処置後 浮いた部分に糊を入れてとめた

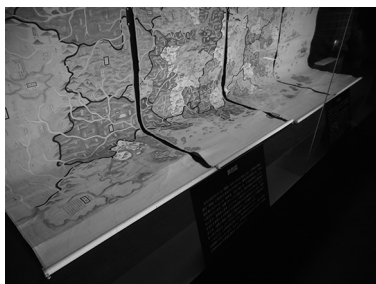


写真17 部分 資料が大きく下部は展示ケースの床面に接地



写真18 部分 歪みや折れの軽減のため、縁をボード片で押さえた

裏面から和紙を生麩糊で貼り付け補強し、浮きは糊をさしてとめた（写真14・16）。

展示にあたっては、普及展示部の職員とともに展示方法に工夫を行った。展示ケースの壁面に掛けたが、ケース壁面の高さに対して、資料が長く下部はケース床面に置く形で展示せざるを得なかった。資料が重みで伸びることによる負荷が過剰にかからないように縁を目立たない黒色の2～3cm幅のボード片を使って固定するようにした（写真17・18）。また4ヶ月弱の展示中にも定期的に経過観察を行い、資料の状態を見ながら展示補助具の調整を行ってもらった。

2-4. 保存容器関連の作業

破損した資料に対して、直接修復処置は行わないで、資料に適した保存容器を作成して資料を収納する作業も多い。ここでは保存容器に補助具を作成することで資料をより安全に取り扱えるようにした例を紹介する。

梅原考古資料⁽⁹⁾日本之部は、写真、図面などを貼込んだカード型の資料が2つ折の厚紙に挟まれて何十枚も重ねられた状態で箱型の容器に収納されている。その箱が100箱以上ある（写真19）。内部には資料を固定する箱に着いた紐があり、資料を取り出すために手を入れる余裕はあまりない状態である（写真20・21）。そのため、一部の箱の内底にはボードに紐で持ち手をつけた敷物が入っており、紐を引張るとボードごと中

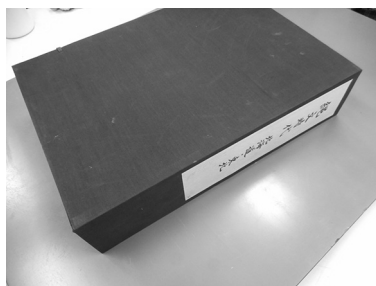


写真19 保存容器外観



写真20 中の状態 作業前 資料が紐で固定されている

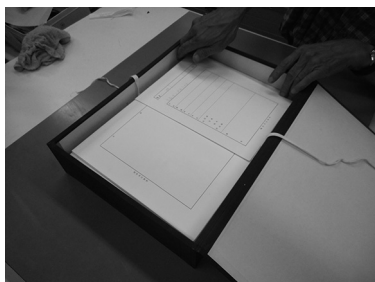


写真21 作業前 資料を箱から取り出すのに手を入れる余地がほとんどない状態



写真22 持ち手をつけたボードを追加作成

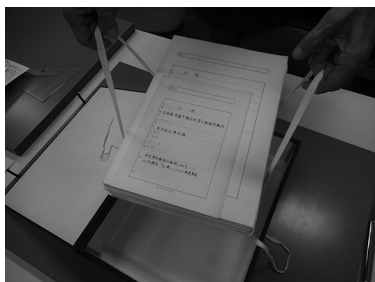


写真23 持ち手付のボードの上に資料をのせて、箱からの出し入れを行う

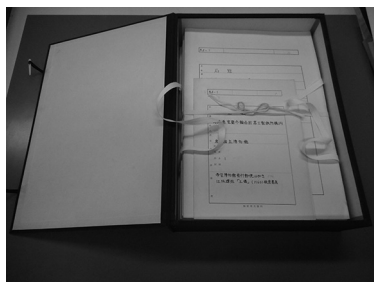


写真24 作業後 持ち手付ボードを入れて、中身の資料の量を減らした

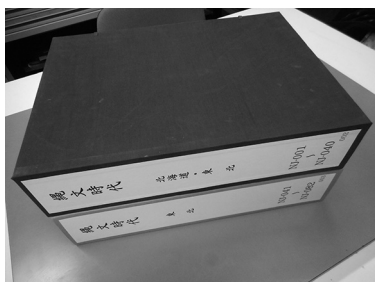


写真25 元と同じ大きさで箱を新に作成

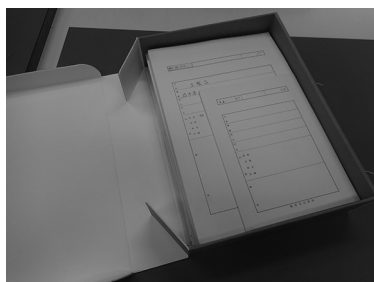


写真26 新規作成の箱、横から資料を取り出せる

身の資料を取り出しやすいうになっていた（写真22・23）。また、取り出し用のボードが入っていても持ち手の紐が左右1本ずつのものもあり、取り出す際に不安定であった。今回は、取り出し用のボードがないものには新規に作成し、持ち手が左右1本ずつのものは、左右で輪になるように各2箇所紐を新につけた。元々資料が箱の蓋が閉まらないほどに入れられているものがあったのと、取り出し用のボードを追加したため厚みが更に増した。そのため、元の箱型の容器と同じ外寸で資料が入る形の中性紙の保存箱を外注で新規作成した。箱内の資料の量を調整することで各箱の重量も減り、より安全な取り扱いができるようになった（写真24～26）。

おわりに

2014年4月から再開された保存修復業務の概要について簡単にではあるが紹介した。作業の多い例として、洋装本、和装本・漢籍、掛軸の処置や保存容器の補助具の作成をあげた。現行の保存修復業務ではこのような作業をしているのかという様子が伝われば幸いである。いずれの作業においても関係各位の協力なしではなし得ないことである。この場を借りて御礼申し上げる。同時にこの機会に、製本室時代の作業の概要も作業者の記憶によるものであるが、加えさせていただいた。

今後とも、図書作業室での作業が、資料の閲覧や展示利用、またひいては後世における利用・保存の一助になればと考える。

注

- (1) 図書作業室の作業者が関わった処置事例は他に以下のものがある。
田村彩子（2017）「一枚もの資料の保存処置事例」『東洋文庫書報』第48号 p23-55 東洋文庫
- (2) 現在東洋文庫で使用している資料の破損等を発見した際に記入する用紙。書庫などに設置されており、発見者が記入後、目録担当者の確認を経て図書作業室にて保管している。
- (3) G. E. モリソン氏が北京駐在中に収集した東アジアに関する欧文の書籍・

絵画・冊子等、約2万4千点のコレクション。東洋文庫の創設者、岩崎久彌が購入した。

- (4) Chinese and Japanese Repository of Facts and Events in Science, History and Art. Vol. II. Ⅲ. (請求記号: XVIII-B-d-32)
- (5) 和装本や漢籍に用いられる資料を保護するための容器の一種である。資料の4面を筒状に包んで、上下の2面は覆われていないものがある。
- (6) Tōbaé. Journal satirique. 1 (請求記号: XVII-11-d-71)
- (7) 白石遺書 (請求記号: 貴 三-M-a-4)
- (8) 大明地理之圖 (請求記号: 貴 XI-6-B-12)
「大地図展—フェルメールも描いたブラウの世界地図」2015年4月22日～2015年8月9日にて展示された。
- (9) 梅原末治博士が収集した東アジア各地域における考古学資料。

参考文献・URL

田村彩子 (2017) 「一枚もの資料の保存処置事例」『東洋文庫書報』第48号 p23-

55 東洋文庫

東洋文庫Webサイト <http://www.toyo-bunko.or.jp/> (2018/01/18)

東洋文庫 梅原末治考古資料 画像データベース

http://124.33.215.236/umehara2008/ume_query.html (2018/01/18)

(公益財団法人東洋文庫保存修復作業担当)